令和元年度「現代美術作家と作品を鑑賞する」プロジェクト（まとめ）
“井上ゆかり《壮大な独り言》の続きを考える”

令和元年度、船橋市教育委員会文化課は、船橋市の中学校（3 校、4 回）に現代美術作家を派遣し、その作品で鑑賞教育を行う「現代美術作家と作品を鑑賞する」プロジェクトを実施しました。同時代に制作される現代美術への理解を深め、想像力・創造力・コミュニケーション力を育むことを目的として、作品を学校の教室に持ち込み作家と対話しながら鑑賞しました。また、作家はこの活動を通して新作を制作し、船橋市民ギャラリーで展示しました。生徒と作家の共同作業による作品は、新たな現代美術の在り方を提示しています。

習志野台中学校美術部　実施プログラム（令和元年７月31 日実施）

夏休みの７月３１日に習志野台中学校美術部生徒（1、2 年生）57 名と実施したプログラムになります。

1　対話型鑑賞による作品鑑賞

井上ゆかり氏の作品≪壮大な独り言≫を美術室に持ち込み作品鑑賞を行いました。この作品は 100 号サイズのパネルを 3 点つなげたもので、3 つのグループに分かれて、それぞれ 1 つの作品として鑑賞しました。学芸員 2 名と星野教諭（美術科）の 3 名がファシリテーターになり、対話型鑑賞という方法を用いて、その作品の意味を生徒同士の対話で読み解いていきます。

2　作品解説の発表

グループでディスカッションした結果を発表しました。それぞれの作品に描かれている内容やその意味、疑問について発言するなかで、生徒は 3 つの作品が同じ人が描いた一つの作品であることに気が付きます。

3　アーティストトーク

作者の井上さんが登場。まず≪壮大な独り言≫を鑑賞したときに感じた疑問や感想について、生徒と話し合いました。そのあとに、井上さんがこれまでどのような作品を作ってきたのか、どのような思いで活動しているのかを話すアーティストトークを実施。井上さんのアーティストとしての想いに聞き入りました。

4　制作「作品の続きを描いてみよう」

トークの最後に、井上さんは今、≪壮大な独り言≫の続きを描こうと考えているので、皆さんのアイディアを聞きたいと話しました。そこで、井上さんからの提案で、この 3 点の作品の続きを考えてみることになりました。用意されたのは≪壮大な独り言≫の画像が印刷されたワークシート。生徒たちは、ここに作品の続きについてイラストや言葉で表現しました。活動中は井上さんが生徒たちの話を聞きながら、それぞれの想いを膨らませて表現するサポートをしました。

5　生徒の発表

ワークシートに描いた内容を発表しました。その内容は、未来をイメージしたものが多く、家族や友達と楽しく暮らしている様子など明るい世界が広がっているものや、環境破壊や戦争で壊れていく世界の姿まで、多様なものとなっていました。集まったたくさんのアイディアに井上さんも大感激。この日はここで終了し、12 月の展覧会での再会を約束しました。

6　展覧会見学会

最終的に中学生が描いたワークシートからヒントを得た新作 2 点を含む≪壮大な独り言≫の作品が完成し、12 月に船橋市民ギャラリーで開催された「まちを描く／まちで描く―絵画に見る郷土の姿」展で発表しました。会期中、習志野台中学校美術部の生徒たちが展覧会見学に来て、井上さんに再会しました。作品のどの部分に誰のアイディアが反映されているか、生徒たちも興味津々。会場には自分たちが描いたワークシートも展示されていたので、改めて井上さんの作品と見比べて、作品の意味を読み解いていました。

授業の記録

※この授業は 3 校で実施しました。上記の内容は③で開催したものになります。

① 令和元年 5 月 15 日　宮本中学校　3 年生（3 クラス）担当：大浜美樹教諭（美術科）
② 令和元年 5 月 31 日　高根台中学校　3 年生（3 クラス）担当：石原輝代教諭（美術科）
③ 令和元年 7 月 31 日　習志野台中学校美術部（1，2 年生　57 名）担当：星野明世教諭（美術科）
④ 令和元年 11 月 14 日、15 日　習志野台中学校　3 年生（7 クラス）担当：星野明世教諭（美術科）

鼎談「現代美術作家と作品を鑑賞する授業を振り返って」（令和元年 12 月 26 日実施）

井上ゆかり（現代美術作家）、星野明世（習志野台中学校　美術教諭）、山本雅美（船橋市教育委員会文化課学芸員）

（山本）「現代美術作家と作品を鑑賞する授業」ができた経緯を振り返ってみたいと思います。

船橋市では「学芸員による対話型鑑賞の授業」に取り組んでいます。その経験から、中学生は発達段階として知的に成熟してきていて、いろいろなことが考えられる年頃になっていることがわかりました。この年代の生徒たちが鑑賞する作品は、複雑で読み解きがいのあるもので、抽象的なことも具体的なことも考えられるものがふさわしいのではないかと思いました。また授業では、作品鑑賞の最後に「作者はどうしてこういう絵を描いたのかな」という疑問がでてきました。美術史や作品が作られた時代背景、作家の人生などを知りたくなったのです。しかし、授業は 50 分間なのでなかなかそこに答えられない。そこで、現代美術を扱えば、手っ取り早く、その疑問に作家自身が答えることが出来るのではないかと思いました。つまり、鑑賞する作品に複雑さが欲しいということ、作品についての説明を描いた本人がすること、この 2 つの理由で「現代美術作家と作品を鑑賞する授業」というプランが頭の中にありました。井上さんに出会って、井上さんが自身の作品を見てほしい相手が子供たちであるということを知り、このプランを実現してみようと思いました。

井上さんは、作品を子どもたちに見てもらいたいという気持ちがあったと話していましたが、それはどうしてですか？

（井上）普段、作品の発表の場が美術館や画廊になるのですが、そうすると来るのは大人ばかりです。これからの未来をつくっていく子供たちと一緒にいろいろなことを考えたりしたいのに、そういう人は誰も見に来ることが出来ない。社会とつながりたいと思っているのに、アーティストというのはどうしても画廊や美術関係者だけの中にしかいない。でも、本当に見てほしいのは普通の生活をしている普通の人たちで、自分の絵を通して話をして考えたかったというのがあって、今回の機会はとてもよかったので参加しました。

（山本）井上さんが人の反応を期待しながら絵を描き始めたのがごく最近のことだったとも話していました。

（井上）やはり、自分の想いとか自分のことばかりを描いていると限界があります。自分の世界をやりつくしたからだと思いますが、もうそこから進めない感じになっているところがありました。そこで作品を見た時に見た人がストーリーを作ることが出来る作品を作ったのです。絵の前で「こういう出来事が起こっているのではないか」と話している人たちを見て、「これやりたかったんだ」とわかりました。作品を通してコミュニケーションが生まれるということ。絵がコミュニケーションを生み出す装置として使われていくというのがいいなと思いました。それから自分の為の作品ではなく、みんなが楽しめる作品を作るようになりました。楽しむといっても、一緒に考えられる作品をと思って制作しました。

（山本）私は 2019 年の「絵画のゆくえ 2019 展」で井上さんの作品を見たのですが、その話を聞いてなるほどと思いました。具体的なモチーフが多いから、見る人が自分の物語を紡ぐことが出来る、それこそ装置としての作品だと思いました。

対談の様子

船橋市は学校連携が出来ていたから、井上さんの作品を見てもらう機会を作ることは可能だと思いました。先に話したとおり、中学生を対象に「現代美術家と作品を鑑賞する授業」を考えていたので、中学校の美術の先生に相談しました。

最初の授業は宮本中学校でした。この授業は大浜先生の計らいで公開研究授業になりました。授業の感想で、生徒たちから「こういうものを描いたらいい」、「高齢化社会のことや環境問題のことを描いてほしい」というリクエストが出てきました。

次の高根台中学校の授業では「作品の続きを考えてみよう」ということになり、石原先生がワークシートを用意してくれました。授業は 50 分間だったので、ワークシートは言葉のメモが中心になりました。星野先生は宮本中の公開授業に参加されましたが、どうでしたか？

（星野）大浜先生が対話型鑑賞の授業をするというのはわかっていましたが、まさか作家本人がいるとは思っていなかったし、本物の作品があることも知らなかったです。予想していたよりもはるかにすごい授業を見ることが出来たと思いました。

私は現代美術に興味があって、どうすれば授業に取り入れることができるかを考えていました。最初、井上さんの絵を見た時に「なんだこれは？」と疑問ばかりでした。授業が進んでいくうちに、3 枚の作品はつながるのではないかと気づきました。3 枚つながった時の存在感の強さと、井上さんのソフトな語り口が印象的でした。私も宮本中の生徒の一員のつもりで純粋に感動し、この授業を習志野台中学校でもやりたいと思いました。

（山本）習志野台中学校では美術部の活動の一環で行うことが決まりました。夏休みの午前中 3 時間と時間が長いことに特徴がありました。グループに分かれての対話型鑑賞だけでなく、井上さんのアーティストトークも聞き、作品の続きを考えるワークシートに絵を描く時間もたっぷりとれました。

（星野）美術部の生徒の反応は大感動でした。もともと現代美術や西洋美術の展覧会に行ったことがある興味関心が高い生徒たちでした。しかし作者が来るということは言っていなかったし、どういう作品が来るとも言わなかったのもあって、本人登場のサプライズはとても衝撃だったと思います。反応は良かったと思います。いまでもサインを大切にしている生徒がいます。家に帰ってお母さんに話したという生徒もいます。また一方で、美術部だけれど美術に苦手意識を持っている子にとっては、今回の課題は自由度が高く、ヒントも多かったので取り組みやすかったと思います。

（山本）話は変わりますが、井上さんは今回の授業を踏まえて新たに作品を制作しました。作品制作についてお話いただけますか？

（井上）私は今のこの時代を作品の中に封じ込めることも自分の仕事だと思っています。戦争中だったら、画家は歴史に残すように戦争の絵を描いています。私は現代アートとして、現在をどう残していくか、世相をどう残していくかというのが自分の仕事だと思っています。そういう考えで作品を作ってきましたが、自分ひとりで考えて描いていたので、それは自分の考えでしかないのですね。自分はあまり一般的な人間でもないし、変わっているとよく言われていたので、そういう変わっている人間が感じていることを描いても、現在を記録する作品にはならないなと思っていました。みんなで考えたこと、たとえば中学生が今感じていることや彼らの意見が入った絵の方が正解かなと、今回はそれをちゃんと残しておこうと思いました。

具体的に言うと、生徒が描いたワークシートを 10 回ぐらい繰り返し読みました。中学生が描いたものの中から気になった言葉や絵に丸を書いていく。どうして自分が気になるかわからないのですが、続けているうちに、例えば、蝶々だったら、なんでこの子の蝶々に自分が反応するのか、惹かれるのだろうかということを考えて、残すべきか残さないべきかを厳選してあの絵が完成しました。でもそれだけだとバラバラなので、絵の中に自分というものを引っ張っていく感じで、まずは自分が何を描こうとしているのかを考えていって、その中に中学生が描いたものからどうしても惹かれるもの、その理由を自分が説明できるものを選んで描き作品が出来ました。

絵の中に絶対に入れたかったのは子供の姿です。中学生の意見を聞くと「未来」なんですね。なにか「未来」について描いている内容が多いのです。私は年を取っているので、あまり未来について考えられないけれど子供の姿は描ける。かろうじて未来の象徴として子供の姿を描くことは許容範囲だと思いました。右端の作品は子供を中心に据えて、そこからどうなのかということを引き寄せていったような感じです。

反対側も未来にしようと思ったのですが、5 枚の絵がそろった時に、見る人が5枚で一つの人生の走馬灯のように思えるといいなと思いおじいさんを描きました。その隣の作品に女の人が出てきたり、男の人が出てきたり、少女が出てきたり、そしてフィナーレで子供の姿につながっていく。未来につながっていく。

自分だったら蝶は飛ばさないと思います。でも中学生に向けて、未来へのはなむけとして、景気よく蝶を飛ばしていこうと思って描きました。また、今の子供は教育虐待とかヘリコプターペアレント（※）なんかがあって、そういうことを描いておきたくて、孫悟空と子供の頭についた輪っかを描きました。

昔の自分だったら自分が思っていることを何の抵抗もなく描いていたと思います。これを見たときに中学生はどう思うのだろうかと考えると、描いていいかどうか悩んだものもあります。共同作業したから見る相手を考えたんだと思います。本来自分なら蝶々を飛ばすことはしなかったのに描けたので、そういうことは面白い。人と作業をしていくことは混乱します。でも混乱しないといけないと思う。アートというのは。アーティストは。そういう生き物だと思う。

（山本）実際に 12 月の展覧会に美術部の生徒の皆さんと見学にいらした星野先生、いかがでしたか？

（星野）生徒は「こうなったんだ」という感動をしていたと思います。みんなじっくりよく見ていたと思います。自分のアイディアが取り入れられたことを話している子もいました。夏休みに作品を見ていたから、一つ一つのものに何だろうと考える姿勢があったと思います。

（山本）最後に星野先生、井上さん今回の授業の感想をお願いします。

（星野）実際、今回のような場があったので、取り組むことができたのが現実です。自分で何かできるかというと、ちょっとやれたかは疑問です。現代美術は教科書には載っていますが、どう扱っていいかわからない面があります。授業は自分で作っていくので、どうしても教師の主観や得意分野がメインになってしまうと私は感じています。自分ができない、わかっていないことは授業では取り入れない、経験の範疇になってしまいます。本当に美術室は閉ざされているし、やれることはかぎられているし、世界の真実を私は伝えられているかというと自信はありませんが、外の方々とつながるというのはそういう点で教師の私にもプラスだし、生徒たちにもプラスだと思います。今回はいい機会だったと思います。

（井上）今回やってみて、ここまで行くんだ、ここまで行ってすごいことになるんだと思いました。次は、新作のこの黄色い 2 点の作品だけで鑑賞会をやりたいと思っています。今回の作品も説明できるように準備しているのですが、その説明をして感想を聞いてみたい。自分だけで作品を作っているときには、制作が終わると「完了」という気持ちが強かったのですが、この作品は本当にこれでよかったんだろうかと思っています。あれだけ時間をかけて生徒の頭を悩ませ、私も悩んで作った作品で、私が作ったとは言い切れないところがすごくあって、半分ぐらいいただいているものがあって、私が説明したかったし、生徒からも意見を聞きたい。いまだに終わり切れない感じがあります。だからまだサインを入れていないのです。ここから続いていくような気がします。私の中では、なんとも言えない、まだ終わっていない気がする。なかなか人の頭を借りて描くことはありませんし、中学生の意見だからこそ、真剣にやらないと、まじめにやらないといけないと思うんです。

授業の様子

生徒が制作した
ワークシート

（※）自分の子供に対し過保護なあまり他人に迷惑をかける「モンスター・ペアレント」の中でも、特に子供に付きまとい子供とその周囲の人間を監視する行為が目立つ親のこと。

井上ゆかり《壮大な独り言》162×710cm 、2018-2019 年

令和元年７月 31 日実施
生徒の感想（習志野台中学校美術部）

「色の使い方と、絵を通してのメッセージの伝え方が勉強になった！」

「この絵の続きを考えているとき最初はなかなか思いつかなかったけど、描いてとみると少しだけですが、描くことができてうれしかったです。今日のことがあり、また美術のことがすごいな！と思いました。」

「残り２枚の絵が明るい未来になって完成するのを楽しみにしています！世界が変わるような絵を見てみたいです。」

「自分が見て思ったこと、感じたことで、作品を作った方との考えがおなじだったり、ちがかったり、感じることも、人それぞれだった。自分がこう見えたものを、相手がなるほど！とか、初めて思ったとかのも、一番強く感じられて、すごくよかったです。」

「美術作品をこんなに近くで見たり、秘められた意図を深くまで考えることはなかったので、とても面白かった。また、作者本人に会えることができ、質問することができたのは、かなり珍しい体験だった。井上さんのスピーチや作品、感性を知り、たくさんのことを吸収できた。一番心に残り、これから後に活用していこうと思ったのは、伝えたいこと、思ったこと、自分の中にあることを、目に見えるよう表現することで、どう描いたらそれを表現できるかを考えるのは難しいが、とても面白いと思った。」

「私たちが残りの２枚の「未来」を考えた絵のアイディアを描き出している時、評価してくださったり、共感してくださり、とてもうれしかったです。」

「絵の続きを書くのが楽しくなってきて、地球の環境の変化を想像して書いて、それを具体的に“あるもの”で表すのがむずかしかったです。」

井上ゆかり　作家プロフィール

1979 年　神奈川県生まれ
2002 年　東京家政大学家政学部服飾美術学科美術専攻卒業
2008 年　「第 26 回上野の森美術館大賞展」入選
　　（2010、12、16、17 年）
2010 年　「シェル美術賞展 2010」入選
2011 年　「第 29 回上野の森美術館大賞展」賞候補（2013、14 年）
2012 年　「シェル美術賞展 2012」木ノ下智恵子審査委員奨励賞
2013 年　第 28 回ホルベイン・スカラシップ奨学生
2017 年　FACE 展 2017　入選（2018 年優秀賞）
現在　千葉県在住

【個展】
2014 年 3 月　「井上ゆかり展」（NICHEGALLERY、東京）
2016 年 5 月　「井上ゆかり展」（NICHEGALLERY、東京）
2017 年 10 月　「井上ゆかり展」（NICHEGALLERY、東京）
2020 年 2 月　「井上ゆかり個展　借りてきた風景」
　　（コート・ギャラリー国立）

【グループ展】
2008 年　「第 26 回上野の森美術館大賞展」（2010 年～）
2010 年　「シェル美術賞展　2010」（2012 年）
2015 年　「第 50 回昭和会展」招待出品
2017 年　「FACE 展　2017」（2018 年）
2019 年　「絵画のゆくえ 2019」（損保ジャパン日本興亜美術館）
2019 年　「令和元年度船橋市所蔵作品展 まちを描く／まちで描く
　　―絵画に見る郷土の姿」（船橋市民ギャラリー）

発行：船橋市教育委員会文化課　令和２年２月
住所：〒273-8501　船橋市湊町２丁目 10 番 25 号
TEL：047-436-2894　　E-mail：bunka@city.funabashi.lg.jp
企画・編集：山本雅美・益子実華（文化課学芸員）